

事など重労働で、体が保てない。ここはシベリアに比べ温暖な気候なので、野の草はもちろんのこと、ネズミ、カエル、ヘビ、ミミズまでも食べて飢えをしのいだものであった。

やがて第二収容所に移動となる。この収容所は炭鉱の収容所で石炭の採掘が主な作業となる。二年目ころよりアクチーブによる民主運動が始まる。日本に帰るには民主化が大事と聞き、文化運動の一環として劇団（おたまじゃくし）を結成して、演劇を通じていかにも民主運動に徹しているごとく振る舞い、帰国の日も早く実現することを願う。

東京ダモイ、今度は本当と何回騙されたことか。ソ連に来て丸三年、昭和二十三年八月、ようやく本当のダモイが実現。八月二十三日舞鶴に上陸し、十年ぶりに故郷に帰る。

私のシベリア抑留

岐阜県 北原賞一

- 一 入営は昭和十八年九月十日。飛行兵として満州第九七飛行場大隊に入隊、満州黒龍江省嫩江であった。
- 二 航空通信教育三カ月。第二七対空無線隊配属、関東州周水子飛行襲撃中隊金子隊に派遣、同朝鮮慶尚南道大田飛行場に派遣、同全羅南道海雲台飛行場派遣、対潜警戒、船団援護作戦の空地連絡に一貫して任務につく。任務解かれ本隊に帰隊。鞍山第一五飛行団に派遣、協力任務につく。
- 三 昭和二十年八月十二日、ソ連軍攻撃の命を受け、錦州飛行場に転進。同十五日、白城子転進の命を受け、錦州駅にて列車待ち中に、近くの従兄宅で玉音放送を聞くも不明で、奉天駅にて知る。
- 四 シベリア鉄道にてノボシビルスク駅より南下、ウズベク共和国タシケント通過、アングレン到着。乗

車した鞍山駅より一カ月余で初めて土の上に立つ。ラーゲルは幕舎で、元の九七飛大の戦友の一部と会う。

作業は河川工事と鉄道工事。二十一年三月、我々飛行団の者十五人はタシケントの第三收容所に移動させらる。作業は煉瓦工場で昼夜二交代で働かされる。大変な重労働で、我々の仲間もついに一人帰らぬ人となる。彼は東京出身で「上田」と言っていたことと妻がいると語ったことを記憶しているが、墓地も何も分らない。

二十三年七月、收容所のほとんどがダモイするも、二十数名は残され第一收容所に送られる。私もその中の一人となる。作業は機関車組立工場で、私は入隊前住友金属にいたので大いに役立つ。初めて給料なるものももらい、生命をつなぐことができた。

五 昭和二十三年九月に待望のダモイの組に入る。二十八日間の列車の旅の後、終着駅ナホトカ到着。何もかも打ち捨てて、復員船「明優丸」に乗船。一度も振り返ることなく故国を望む。十月三日舞鶴に帰

港、涙が流れる。

帰国後は苦闘の連続だったが、どうにか家庭を持ち人並みの生活を得て、現在を安楽に過ごしている。

六 タシケントにおいて我々のグループでは上田君（そうと思うが名前は記憶にない）一人だったが、他の重病者は他へ移されたので分からない。同じ收容所に六百人くらいはいたと思うが、この地区に第一から第五まで煉瓦工場があつたので、自分たちのグループ以外の詳しい情報は伝え聞く以外全然分からなかつた。事故死や病死がかなりあつたことは事実と思う。上田君の消息もだれか家族の方に伝えてくれたか？……と思いつつ、彼の冥福を祈ります。平和な現在の生活の中でも時に当時を思い出して、亡き友に申し訳なさでいっぱいである。